

「『毒麦』のたとえ」という小標題が掲げられます。マタイはこの箇所をマルコ4:26-29、つまり「成長する種」のたとえを採用せず、それに代わってこの「毒麦」のたとえを挿入して編集しています。何故でしょうか。おそらく前の段落で、人とは努力であらゆる困難を克服して「実を結ぶ」(23)ということを強調したため、マルコが記すような一度蒔いた後は収穫までほったらかしにしておけば良いというたとえはマタイの文脈に適さないと判断したからなのだと考えられます。

この「毒麦」のたとえはルカも採用していませんので、マタイがこれをどこから持ってきたのかは不明です。ただ、マタイが採用しなかったマルコの「成長する種」のたとえと「眠る・麦・芽が出る・実る・刈り入れ」の語が共通しています。しかし、たとえの意図は明らかに異なっているので、マタイは独自の資料からたとえを得たのだ

と考えられます。

このたとえの本来の狙いは29-30aの主人の言葉でしょう。その言葉を引き出すための問いは28b「では、行って抜き集めておきましょうか」という言葉です。つまり、前半の24-28aの叙述は主人や僕たちには責任がないことを示しているのです。「敵」(25,28a)の登場も唐突でいかにも寓話的に仕上げられています。

ここでマタイが主張するのはマルコのような「神頼み」的な荒削りで漠然とした人間理解ではなく、人とは善悪を併せ持つ存在であることを逆説的に述べてゆくのです。だから主人や僕の意志に関わりなく「毒麦」は混ざるのです。

本来、この「毒麦」とは麦畑での厄介者でした。ことにまだ小さいうちは麦と区別がつきにくかったようです。又、毒という名前がついている通り、昆虫

等動物への神経毒を持っていました。ですから、本日の箇所では当時のパレスティナ地方の農民たちによる「毒麦」への一般的対処方法が描かれています。収穫の直前に「毒麦」だけをまず刈り取ってしまうというわけです。マタイはこのような誰もがよく知っている身近な題材を用いて福音の質を描き出そうといたしました。それはとりもなおさず、人が他者の中に「毒麦」を見いだして性急に裁いてしまったり、善悪をはっきりと分離してしまうことの危険性を教えているのです。

つまり、人の内には「毒麦」に象徴される悪が存在しているが、それは自分自身の姿であることを描くのです。しかし、そのことによっても神の国の到来はいささかも妨害されることはないと言います。マタイは説くのです。、神の国は確実に実現しつつあるということであり、人の善悪は神の裁きを代行できない(1コリ4:5)ということの宣言でもあるのです。

わたしたちは「この人による以外に救いはない」とイエスを告白します。それはこのイエスこそ人に与えられた唯一の救いであると主張しているのでは決してないのです。そうではなく、わたしたちはこのイエスに出会って、わたしたち自身の根底にある問題が初めて示され、それらからの究極的な救いが与えられたのです。それは、イエス・キリストの救いの唯一性を外に向かって主張するのではなく、イエス・キリストに救いの究極性を信じた内なる確信を吐露するのです。まさに信仰とは唯一性ではなく、究極性の告白なのです。